

エディトリアル

地域医療研究所長 山田隆司

年明け早々に中国武漢で新型コロナウイルス感染症が発生したというニュースが、その後現在のような展開になろうとは誰が予想したであろうか。2月には横浜に接岸したクルーズ船でのクラスター発生で一気に現実問題としてわれわれの身近に迫ってきた。すでにその際には感染症病床を持つ関東圏内の病院には感染患者が搬送されており、今回の特集の中からその際の緊張を感じとることができる。

藤谷論文や根本論文からは、感染症対策のノウハウを持った大学病院、感染症指定医療機関であってもまだまだ未知の部分が多い初期の段階で対応することの苦悩がひしひしと伝わってくる。危険に身を曝しながら人工呼吸器、ECMO管理を要する重症患者に対応された様子にはただただ敬意を表するばかりである。

我が国の感染症病床は総数として極めて少ない状況から、初期の段階から専門的な対応ができる病院以外でも感染患者の受け入れが迫られた。宮崎論文では一般的な地域病院がいち早く積極的な受け入れに舵を取り、刻々と変わりゆく状況に病院を変化させ対応した様子が報告されている。また杉田論文では感染症病床を持つ地域病院とはいえ、これまで経験もなく、必ずしも防護具や検査体制が十分でない中、覚悟を決めて感染患者を受け入れた状況が記されており、それぞれの管理者の強いリーダーシップをうかがい知ることができる。

浅井論文では離島での感染患者という、人材や物資、設備等全てが限られた状況下での対応が報告されており、当時の緊張がいかばかりかと迫力のある内容となっている。菅波他論文では山間へき地での感染症対策が報告されているが、まさに地域包括ケアの視点を持った内容となっており他の地域にとって良い手本となろう。

吉田論文、伊藤論文は、院内感染、施設内感染を経験した生々しい報告となっている。必ずしも誇れない事象をあえて報告していただいたのは、地域医療に携わる者が貴重な経験を共有し、そこから多くを学びとることがぜひ必要だと考えたからである。発症する前から感染性のあるウイルスによる院内感染をどう防ぎうるのか、両氏の真摯な報告から学びたい。

我が国ではPCR検査体制の不備が度々報告され、なかなか感染防御策が取りにくい現状が取り沙汰されている。とはいえ世界有数のCT保有国としてCT検査は臨床現場で早期から大いに役立った印象があり、白田他論文に詳細が述べられている。

また我が国の対策はいろいろな評価がありながらも、これまでおおむね諸外国と比べても良好な成績で推移していることは誰も否定しないところであろう。その一因はやはり紛れもなく保健所が中心になってこれまで築いてきた我が国の伝染病対策の手法であると思われる。藤内論文では行政の立場からこれまでの振り返り今後の展望が述べられている。

ヒト、カネ、モノが限られる中、地域の医療従事者は精いっぱい未知のウイルスに立ち向かってきた。今回の特集では逃げ場のない地域で、感染症に関わる課題を真正面から受け止め、悩み苦しみながらも学習し、それを共有しつつ決断し、乗り越えていったそれぞれの医療者の気高い日常が描かれている。この特集から読者の皆さんも多くを学びとってほしい。